

み子イエスの「突入」

(ヨハネ一・九〜一四a)

戦後七〇年を経て「ゼロ」は飛んだ。多くの関係者と航空ファンが見守る中、鹿児島県知覧と並ぶかつての特攻隊の出撃基地、鹿屋基地の上空を思いのほか重い音を響かせて飛ぶ「ゼロ」の雄姿を見ていたら、ふっと「トラ」とあだ名されていたことを思い出した。今から四半世紀も前のシンガポールでの出来事だった。ある先輩が「TAROH」を「TORAH（律法）」と誤読してそれは始まり、もう一人の先輩（元空軍パイロット）によつて誤読は定着してしまった。その背景にあったのは一本のハリウッドムービー、その名も「Torai Torai Torai（我奇襲に成功せり）」。おかげで何度も「不、不是。Tora 是老虎、我的名子叫 Taro」と言わねばならなかった。

閑話休題。当時の暗号と言えども一つ有名なものがある。「ト連送」だ。

意味は「全軍突撃せよ」であるが、今朝の個所はまさにまことの光であり、ことばであるキリストのこの世への歴史的突入が描かれている。以下二つのことを学んでみたい。

一、拒絶された「イエス」

九節には二通りの翻訳の可能性がある。

一つは新改訳の本文のように「まこと
の光が世に来ようとしていた」と訳すものであり、もう一つは欄外に書かれているように「まことの光があった。それは世に来てすべての人を照らすものである」とするものである。しかしこの段落の主要なメッセージが永遠のことばであり、創造に先だつて存在された「いのち」である、み子のこの世への来臨を指す（参一・一四）ということを考えるとやはり「来ようとしていた」の方が相応しいだろう。時空を作ったお方であり、時空の外に居たイエスは私たちを救い、神の子とするためにわざわざ歴史の中に入つてこられたのだ。ドローンよろしく遠くから遠隔操作で近づいたのではない、み子イエスは世を救うため、捨て身でこの地に降り立ったのだ。

しかし当の世はどうだ。一〇節には「知らなかった」、一一節には「受け入れなかった」とある。「知る」と訳されることは単なる知的理解に留まらず人格的関係を意味していると言われている。実際福音書を読み進めるとユダヤ人たちは何と彼らを救うために来られたお方を「ガン無視」したことが解る。「心なき国人に踏まれ散らされしが（聖歌五三〇「悩む世人のために」二節）」とある通りなのだ。

二、受け入れられた「イエス」

世を救うために、歴史の中に突入されたイエスを多くの人々は無視し、拒絶した。その最たるものがイエスの十字架である。

確かにパリサイ人や律法学者らに扇動されたユダヤ人たちは「王」と紹介されたイエスに向かい「除け、除け。十字架につけろ」と叫んだ（一九・一五）。しかし全ての人が彼を否んだわけではなかった。イエスには追従者がいた。十二弟子をはじめとする弟子たち。イエスに出会ったサマリヤの女とその証言によつてイエスを信じたサマリヤ人（四章）。更にはイエスに出会った生まれつき目の見えない男（九章）など、イエスへの全幅の信頼を現し、彼を受け入れた者たちは少数であったが確かに存在していたのだ。

福音書記者はそれらイエスを受け入れ、信じた者に対してイエスが与えたものを「神の子」とされる特権だと語る。これは生物学的でないのちとは異なる、霊である神による霊的ないのちであり、それがゆえにあらゆる人間の思考を凌駕するものである。もはや血統や人種、社会基層などに入る余地はない。それほどまでに圧倒的ないのちなのだ。私たちを救うために、この世に突入したみ子イエスの名、即ち「主は救う」という名を受け入れる者はその瞬間から新しいいのちに生きることが出来るのである。ハレルヤ！

* * *

ある日の朝のこと。極楽の蓮池のふちを逍遙していた御釈迦様がふと立ちどまつて池の下にある地獄を覗き込むと、ご存じ芥川龍之介の『蜘蛛の糸』である。地獄で苦しむカンダタが生前にした一つの善行を覚えていた釈迦が彼にワンモアチャンスを与えんと彼の前に蜘蛛の糸を垂らす。千載一遇のチャンス逃すまいとして蜘蛛の糸をつかんだカンダタは元泥棒の技術を駆使して登る、登る。しかしその途中、眼下を見下ろすとそこには自らと同じように蜘蛛の糸を辿つて地獄からの脱出を試みる大勢の罪人たちが。不安になった彼は大声で「この糸はオレのものだ」といった途端に糸はぷつりと切れ、地獄へとまっさかさま。一部始終を見た釈迦は悲しそうにそこを立ち去るというお話した。この物語に流れる「因果応報」の世界観は「自己責任論」と名前を変えて今日も健在だ。だが聖書の救いはこれとは異なる。父が派遣するのはかけがえないひとり子であり、「突入」してきたみ子を信じるものはどんな人でも救われるのだ。友よ。私たちの所に来て下さったキリストを見上げ、より頼もう。救いはそこにのみある。 Jesus save!